

哀歎抄（十二）

尾崎文英

神田川まつりの笛も届くやう船の舳先に物思ひしぬ

都鳥汝が鳴くからに想ひ出づ若かりしときうつくしきひと

浅野晃師を偲びて

万巻の書物ものせる師とあひぬ詩文集いま大冊となる

先生が成田れん子と橋に佇つ「ばらの眼の乙女」たゆたひてあぬ

天と地をどよもすごとくかけゆきし師の御魂なり胸板をうつ

先生の意識主体は詩人にて瑞瑞しくて愈愈孤高

先生の潔きところは厳として海山となりひかりながるる

若かりしときを思へば面影は清かに見えて浜に汝が居り

初島へ旅をせしこと思ひ出づ新年の海詩情滾ちて

残る虫かなしき虫と伝へくる新女将なる絵はがきを読む

（『日本短歌協会会員』）

